言語活動を取り入れた活用型音楽学習についての一考察
－初等教育における実践事例をもとに－

時得　紀子*・村川　雅弘**・田中　博之***

1．はじめに

新しい学習指導要領においては，「言語活動の充実」と「活用を図る学習活動」という２つの改訂のキーワードが提案されている。それはいいかえれば，「豊かな言語活動を通して，習得した知識・技能を活用して個性的に表現する力」を育てる教育を創造することを求めているといえよう。

音楽科授業の中でこうした力を培っていくためには，具体的にどのような手立ての工夫が求められるのだろうか。本稿では，活動の手掛かりとして，子どもたちの学習に「かかわり合い」を育む場の設定に配慮することが鍵となるのではないかという仮説を掲げたいと考える。この考え方に導かれる契機となったのは，複数の公立小学校の実践事例に示唆を得たためである。これら米国の事例では，子どもたちが表現を互いに分かち合う機会を日常的にもつことで，技能の向上に切磋琢磨し合う意欲を高めることに導かれている。加えて，さまざまな思いを言葉にして，互いの練習の成果を称え合うことで，意思を持って音楽を注意深く聴く力を喚起することにも成果をあげていると捉えられる。

我が国の従来の音楽科においては，指導者が，知識や技能を個別のスタンスで評価することに意識が向くあまり，「かかわり合い」を授業の中にどう生かしていくかといった配慮について努めて意識することは求められてこなかったといえよう。また，小学校６年間の学校音楽を経て中学生になっても，音楽的な自立がはかれないといった課題も叫ばれて久しいが，このように授業における音楽学習が子どもの知識理解や音楽的技能の真の体得につながらない実態も，かかわり合いの中で学ぶことを通じて改善が図られていくのではなかろうか。

こうした課題解決への期待とともに，これまでの既成楽曲の歌唱や器楽合奏の練習に偏り過ぎた学習を改め，子どもたちによる創作活動の機会を増やしたりするなどして，音・音楽そのものに触れ，互いに意見交換しながら音楽的能力を高めていく活動が，今こそ言語活動の充実と共に強く求められてきている。

本稿では，始めに米国の実践について取り上げた後，学校教育全般に通ずる「言葉の力」について，培われる力ごとに分類を試みる。さらにこれらを踏まえた上で，我が国の小学校における実践事例を手掛かりとして，音楽科授業の中で「言葉の力」を培っていくための手立てなどについて考察を試みるものである。

2．米国公立小学校の試みから

(1)　毎週末は演奏会で交流する公立小の実践

本項では，総合表現活動の日米比較研究調査の機会を得て訪れた，ある小学校の伝統的な取り組みについて述べたい。始めに，「かかわり合い」を育むことを重視している，米国コネチカット州ハートフォードにある公立小学校，ウォルコット スクール（Wolcott School）恒例のユニークな，毎週金曜日の発表会の実践がもたらす効果について注目したい。

同小学校では週末を締めくくる金曜の午後，全校児童が講堂に集まり，およそ2時間を費やしてこの日のために各自が練習した，さまざまな表現を異学年が一堂に会して披露し合うのである。この発表会は同小学校の伝統として受け継がれ，毎週末に定期的に上演されるのがならわしとなっている。

この発表会では，クラス合唱や合奏のみならず，独唱や少人数の歌，個人のバイオリン演奏，など音楽による発表が大半を占めるが，時に詩の朗読，寸劇，ストリートダンスを含むダンスパフォーマンスなどの演目も登場する。そして，それぞれの発表に対して，低学年（日本の年長組であるキンダークラスを含む）から高学年まで，児童による司会者が，演奏者や聴衆の子どもたちにランダムに次々とインタビューをしていく。学年は多岐に及ぶため，当然ながら児童たち

＊ 上越教育大学　＊＊ 鳴門教育大学　＊＊＊ 早稲田大学大学院教職研究科

の語彙の幅も多様となるが，自分なりの言葉で演奏への思いを語り合い，学年を超えて感想を分かち合うのである。こうした一連の活動を通じて，音楽学習にとって重要な非言語のコミュニケーションのみならず言語によるコミュニケーション力を高めることで，「表現力」を育む「活用型学習」が展開できているのではないかと考える。

同小学校の音楽科の授業時数は週２時間となっているが，その教科授業で学んだ読譜の知識や演奏技能を実際に仲間の前で披露する活動そのものが，何よりも音楽学習の絶好の活用場面となることは言うまでもない。また，その演奏発表の機会が学期末にのみ開催といった少ない頻度ではなく，頻繁に催されることからも，日頃の教科学習の技能面のより確かな定着や向上が期待されよう。また，週末の発表会の翌週には，母国語である英語の書き方の時間に作文を書くことで，仲間の演奏の良さを自らの言葉を手繰り寄せながら，思いを表現する活動も大切にしている。すなわち，鑑賞活動に，「書く」「話す」活動をつなげることによって，実践的なコミュニケーション力を育てているのである。

同小学校が表現活動に力を入れていること，そして子ども同志のかかわり合いを何よりも重視しながら，言語活動にも力を注いでいる実践には保護者から多くの賛同が得られている。その結果，公立にもかかわらず地域枠を超えて越境入学を希望する家庭が後を絶たない状況が続いている。学生時代に演劇教育を専攻してきたという同小学校のＡ教諭は，移民してきた子どもたちが言葉を習得する際に，国語の時間以上に寸劇などの実演の場面の体験を通じてこそ，状況（シチュエーション）に応じた，言葉の表現をマスターできるのだということを強調した。音楽表現活動も，仲間と演奏や鑑賞を分かち合う場面を共有してこそ，細かなニュアンスを含めた意見交換が可能になるのではなかろうか。そして，音楽的に感受したイメージを言葉に置き換えることで，感覚的・抽象的なイメージを具体的な言葉に置き換える力を培うことにつながるものと捉えるのである。

⑵　ディスカッションから育まれる言語化する力

上越教育大学の姉妹校として協定を結んでいるアイオワ大学の周辺には，先進的な音楽学習の実践を試みる小学校が存在する。取り分け，ジェームス・ヴァン・アレン小学校（James Van Allen Elementary School）では，キンダークラスから６年生まで，一貫して「音楽づくり」を重視しており，学期や声による創作表現活動が活発に展開されている。同小学校では，創作に適している，多彩なオルフ楽器やアフリカン・ドラムが常備され，身体表現活動のための広く，開放的な空間の音楽室が整えられている。さらに，中学年や高学年ともなれば，グループ毎の創作表現を鑑賞した後のディスカッションにおいて，豊富な語彙を使った，感想や意見の交換が展開される。特筆すべきは，キンダークラスの音楽授業においても，個々の演奏，グル―プ毎の演奏を聴き合った後に，子どもが自らの言葉で感想を述べ合う活動が，日常的に展開されていることである。子どもたちの集中力が途切れがちな授業の後半になっても，互いに聴き合う姿勢を保つように指導者は幾度でも注意を喚起し，５，６歳の時期から基本的な聴取のマナーを徹底して指導するのである。

もとより米国にはスピーチコミュニケーションという指導体系があり，幼稚園からスピーチにかかわる訓練が始まり，大学に至るまで一貫して学校教育のさまざまな場面で実践される。その初歩的な事例では，小学校低学年における，シェアリングとしての，“Show and Tell”があげられよう。これは，ある一つの事物や事柄を自分から他者に伝えるための言語などを介した表現活動である。例えば自らが得意とする音楽演奏であるならば，その音楽について語り，実演して見せるといったことが求められる。こうした表現活動が，低学年の段階から恒常的に実践されていくのである。

また小学校高学年では，全ての教科でディスカッションや口頭発表が盛んに行われる。一つのテーマについて，賛成派と反対派に分かれて主張を考える。時には自身の考えとは正反対のグループにあえて属して，主張を考えさせる場面も設定される。先に述べた，米国の公立小の事例のようにキンダークラスから取り組んでいる，他者の表現への感想を述べるといった音楽学習においても，なぜ優れた演奏だと思うのか，根拠を持って論理立てて説明することが徹底して指導される。その際，他者の意見への聴取態度や，敬意を払う姿勢も配慮された指導がなされることは言うまでもない。

３．言葉の力を育てる音楽科教育の創造

前項を受けて，音楽科においてもこのように言語によるコミュニケーションを活性化する手立てを取ることによって「言葉の力」を育む活用型学習の導入が望まれる。しかしながら我が国は，そうした「言葉の力」を教育実践によって体系的に学ばせていこうという取り組みがなされて来ていない現状にある。そこで新しい教育課程において，このような表現力の構造を検討し，それを具体化した20項目からなる「言葉の力」とそれを育てる多様な教育メソッドを整理してみた。

「言葉の力」を育てるということは，子どもたちに，「力のある言葉」がしっかりと目的と状況に応じて使いこなせ

るようになるようにするということでもある。こうした背景から，本項では，次のような６つの力の領域で，合計20項目の「言葉の力」を整理してみたのである。下記の資料１．に示した多様な言葉の力の育成を意識的に全教科における活用学習の中で行うことが求められるのである。

資料１．「言葉の力」の６領域モデル

領域Ａ　論理的に思考したり表現する力 ①　論理を組み立てる力 ②　思考を明確にする力 ③　なぜを問い合う力	領域Ｄ　実践や行動につなげる力 ①　正義を訴える力 ②　気づきを促す力 ③　企画を立てる力 ④　やる気を起こす力
領域Ｂ　人間関係を豊かにする力 ①　よさを認める力 ②　笑わせ和ませる力 ③　励まし応援する力 ④　心を伝える力 ⑤　合意を形成する力	領域Ｅ　自分を励まし創る力 ①　自信をつける力 ②　成長を祝い合う力 ③　生き方を描く力
領域Ｃ　イメージや感性を豊かに創造する力 ①　イメージを創る力 ②　感性を高める力 ③　人の心を癒す力	領域Ｆ　言葉とその使い方を評価する力 ①　言葉を評価する力 ②　間違いを正す力

このようにして６領域20項目の「言葉の力」を設定することにより，バランスの取れた総合的な言語力の育成を行うことができるのである。この資料１．の「領域Ｂ　人間関係を豊かにする力」に掲げた５つの力を培うことは欠かすことができないものである。なぜならば，人間は社会的存在であり，常に他者との関わりをもちながら生きていくことが最重要の人間的課題なのである。それゆえに，「言葉の力」によって新たな人との人間関係を切り開き，豊かな関係を維持しながら，さらに関係修復までを行う力を育てることが学校教育の大きな課題であることは疑いもない。

次に着目したいのは，「領域Ｃ　イメージや感性を豊かに創造する力」を発揮する言葉の力を育てる教育であり，具体的には，①イメージを創る力，②感性を高める力，③人の心を癒す力という３つの力である。表現活動により深くかかわると考えられるこの領域の力は，人間の創造性や想像力を発揮して，まだ見ていないものを想像して見たり，まだない感覚を想像して作ったり，まだ聞いたことのないお話を聞いたりする力である。つまり，新しいものを生み出す言葉の力といってよい。そうした人間にのみ本来備わっている創造性を伸張するために，学校教育のカリキュラムのなかに，物語の創作やドラマづくり，鑑賞文の作成，そしてエッセイなどを書かせる活動を豊かに組み入れたいのである。そうして想像して創った物語やドラマ，そして文章は，また見る人や読む人に感動を与え，さらに新しいイメージや感性・感覚を生み出していく刺激となるのである。

活用学習においては，この６領域20項目の言葉の力の中からどの力を重点的に育成することをねらいとするのかを明確にとらえて，単元案や指導案に新たな見出しを起こして言葉の力の項目やその育成計画を記述することや，それぞれの項目に効果的な指導メソッドを意識的に実践することが大切である。

これらを総括すると音楽科においては，「領域Ｂ　人間関係を豊かにする力」の「よさを認める力」において，自分や友だちの鑑賞や表現のよさを言葉で認め合う活動が，また，「領域Ｃ　イメージや感性を豊かに創造する力」の「イメージを創る力」においては，鑑賞や表現においてどのような工夫や活用をしたのかを言葉で表現する活動が，そして，「領域Ｅ　自分を励まし創る力」の「自信をつける力」においては，鑑賞や表現における自己評価や相互評価を言葉で伝え合う活動が，教科の特性に対応した言語活動の充実の在り方としてふさわしいだろう。

これらは音楽科において音楽を通じての言葉によるやりとりによって，自他のつながりの中で育まれていくものと捉えられる。つまり，音楽を媒介とした，言葉での「かかわり合い」を中心とした言語活動を充実させることによって，育まれると考えるのである。こうした観点を踏まえながら，次項では我が国の実践に目を向け，言語活動が生かされた初等教育における具体的な事例を取り上げてみたい。

４．実践事例「かかわり合いを通しての児童の表現力の育成」

ここでは，鳴門教育大学教職大学院の授業実践・カリキュラム開発コースの日浦有紀子の「かかわり合いを通しての児童の表現力の育成～音楽科の授業実践を中心として～」（平成22年度最終成果報告書）の次の３つの授業実践の中か

ら，特に，かかわり合いと表現を活性化させるための手立てを中心にまとめたい。

実践①：第４学年「歌と楽器のひびきを合わせよう」（全８時間）32名［平成22年５月実施］

実践②：第４学年「いろいろな音のちがいを感じ取ろう」（全８時間）32名［平成22年10月実施］

実践③：第６学年「曲想を味わおう」（全12時間）31名［平成22年11月実施］

⑴　かかわり合いと表現

本実践では表現について，「外的な働きかけによって生じた何らかの感情を，思いや意図をもってさまざまな方法で他者に伝えること。」と捉えた。また，かかわり合いについては，「児童相互のかかわり合いにとどまらず，子どもと教師，子どもと音・音楽とのかかわり合いを含めて捉える」ものとした。

子どもが教材である楽曲に出会いかかわることにより，何らかの感情が生まれる。そしてその感情を歌や楽器または言葉によって他の児童や教師に伝える。このように他者とかかわることで，思いを共有したり，さらによりよいものにしようと互いにかかわり合いながら工夫を重ねたりしていく。こうしたプロセスでは，自分の思いや意図を表現するために，さまざまな音や音楽，人とかかわり合うことは極めて重要であるとした立場から，本実践に取り組むものである。

⑵　かかわり合いと表現を促進するための手立て

①　言語環境の整備

音楽科では音楽体験（歌唱や演奏，鑑賞など）を通して自分が感じたことや学んだことを言葉で表すことにより，自分の思いや考えを明らかにしたり，整理したりすることができる。また，言葉で伝え合うことで，表現をよりよいものへと工夫することができたり，その中で他の児童のよさに気付く場面も生じてくるものと考えられる。

音楽表現においても，子どもが自分の思いや考えを表現するのに適格な言葉を知っていなければ，その思いや考えを適切に表すことが困難であろう。そこで，「音楽のたまてばこ」の表を用意し，前面黒板の脇に常掲した。上の部分が「音楽の要素のたまてばこ」で「速さ」や「強弱」，「和音」などの音楽を特徴付ける要素や音楽の仕組みとそれらの働きに関する用語である。表の下の部分が感じたことを表現するための言葉である。（写真１．参照）また，音楽室に国語辞典も常置した。

②　かかわり合いを深めるグループ形態

音楽科授業において，かかわり合いを通して表現力を高めるためにはグループ形態が必然であると考える。小集団化することで，全体の場では発言しにくい児童にも述べやすい場を与えることができ，また児童一人ひとりが自己の役割を感じ，主体的に学習に臨むことが期待されるからだ。実践①では，音楽の能力面・技能面だけでなく，人間関係にも配慮し，８人グループを形成している。実践②では，できるだけ多様な児童とのかかわりを意図し，実践①とは異なるグループ編成にしている。事例③については演奏内容の性質上，少人数での編成が困難で，１グループが16名としている。この大人数ではかかわり合いを深めることは難しいが，音楽科の場合には，題材等によりグループの人数が規定されることも否めない。

③　ワークシートの工夫

３つの実践ではいずれもワークシートを作成し活用している。ワークシートは児童一人ひとりの思考・判断・表現を促したり，グループにおける集団思考を促す上で極めて重要である。実践①では，音楽が苦手な児童にも理解しやすいように，音譜とリズム譜が同時に分かるように工夫している。また，リズムを音符で記譜することに限定せず，自分なりの記号等を使うことによって，児童自身が理解可能な方法で書き込むことができるようにしている。

実践②では，個人用とグループ用の２種類のワークシートを作成した。個人用には，活動のヒントやワークシートの記述の仕方を記載し，児童一人ひとりによる主体的な学習ができるように工夫した。また，グループ用のワークシートには，グループ活動において自分たちが考えためあてを意識して取り組むことができるように，自分たちのイメージを記入する欄を設けたり，楽器の種類や鳴らし方を記入する欄を広めに設けている。事例③では，グループごとに課題曲である「木星」の第４主題についてのサブタイトルをワークシートに書かせ，感じたことを短い言葉で言語化させている。自分たちが感じた曲想を生かして自分たちが考えたイメージに合うような演奏になるには，どのような楽器を選び，組み合わせたらよいのか，人数はそれぞれ何人いるのかを書かせ，「視覚化」している。また，活動中は常に確認することができるように掲示している。

写真１．「音楽のたまてばこ」の表

④　自己評価と相互評価の工夫

互いの演奏や歌唱を聴き合い，評価し合い，また，自らの活動を評価することは，各自がパフォーマンスを高める上で極めて大切である。事例③では，互いの演奏を聴き合うだけでなく，自分自身の演奏を聴く場面を設けている。そのためのワークシートには，児童本人が記入する欄として，「工夫したいこと・がんばりたいこと」「そのためにどうするか」「ひとこと」を用意し，また，教師による朱書きの欄として「先生から」を５回分用意した。グループ間で聴き合う際には，ワークショップを行っている。相手のグループの演奏を聴き，気づいたこと（黄色）やアドバイス（桃色）を付箋に書かせた後，ＫＪ法により整理させている。

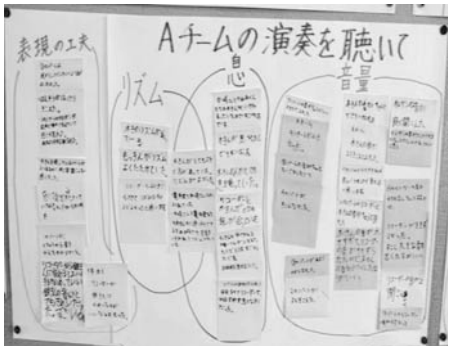

写真２．ＫＪ法による付箋での分類

こうした活動により，思ったことを書く行為を通して相手に伝わるように文字表現しようとする力が身につくと共に，文字言語に残すことにより，相手グループの事後の学習にも有効に活用できるものと考えている。(写真２．参照)

⑤　児童一人ひとりの思考を促す発表方法の工夫

事例②においては，全体発表の場において，互いのグループが使用している楽器や楽器の使い方と表現したいイメージとを関連づけながら聴いて欲しいと考え，次のようなクイズ形式の工夫を行っている。

１．演奏者は，演奏前に何のカーニバルを演奏するかを聴き手に伝える。
２．聴き手は，使用している楽器や鳴らし方，速さなどに気をつけて聴き，どんな様子を表しているかを考える。
３．答えを思いついた児童は発表する。その際に，使用している楽器の鳴らし方などについて理由を述べる。
４．正解かどうかを演奏者が判断する。

⑥　振り返りカードの工夫

一つの学習のまとまりにおいて，学びの自己評価や授業で学んだことを自分の言葉で書き留めておくことは，知識や技能の定着において重要である。全ての実践において，授業の最後に「振り返りカード」を書かせている。事例①では，めあての達成，グループ内での協力，他のグループからの学びや助言，次時の目標等について３段階評価及び自己評価を行っている。事例②では，１時間ごとに「グループのめあて」「工夫したいこと，がんばりたいこと」「そのためにどうするか」「ひとこと」を各自に記入させている。事例③でも②と同様のワークシートの最後に「(学習を終えて･･･)自分ががんばったこと，できるようになったことなど」を自由に記述させている。振り返りカードはいずれも，児童自身が見通しや意欲をもって学習に臨めるだけでなく，教師にとって児童一人ひとりの学習の習熟状況や意欲を理解する上で有効に働いている。

⑶　授業における子どもの姿に見る成果と課題

子どもたちは，曲に対して自分なりのイメージやめあてを持ち，自分たちの思いや意図を持って表現していた。その際には学習形態やワークシート，振り返りカード，「言葉のたまてばこ」などの手立てが有効に働いたと考えられる。一方，グループや個人での活動に戸惑いが見られた場面もあることから，今後はワークシート自体の見直しも必要となろう。その上で学習活動や子どもの意識との関連を意識した学習課題を設定していくといった改善が，今後は求められるだろう。

本活動を通じて，本稿資料１．「言葉の力」のモデルの「領域Ｂ　人間関係を豊かにする力」や，「領域Ｃ　イメージや感性を豊かに創造する力」などが互いの活動評価を通じて築かれたものと捉えられる。さらには，振り返りカードを通じて，「領域Ｅ　自分を励まし創る力」が子どもたちに培われたことは，自尊感情を育むなど，本活動の成果が見られたものといえよう。

５．実践事例「みんなで創ろう「創作組曲」～組曲づくりを通し，仲間のよさに気付き，認め合い高め合う子ども～」

大手町小学校６年生の「創作組曲」は，同小学校の伝統の一つとして受け継がれてきた。６年間の学びの集大成として，卒業式において子どもたちが自らが創作してきた組曲の発表をする。組曲には，友達や仲間とのふれあいを通して感じたこと，生活・総合学習の実践から考えたこと，卒業への思いなど，学校生活を通して培われた子どもの思いが込められている。この創作活動では，作曲はもちろん，歌詞の全てに子どもたちの学びの体験を通した思いが表されているのである。

前年度，卒業生が感動のあまり，これら自作の歌曲を涙を流しながら歌う様子を見て，在校生は，「６学年になると創作組曲を創るんだ」「卒業式で歌うんだ」という意識を強くもつようになっていくものと捉えられる。

本実践においては，主に培いたい資質・能力として，「６年間の学校生活や生活・総合学習の集大成として，その学年の特徴を生かした歌詞や曲を創作する」活動における，「創造的探求心」を掲げた。加えて，「自分たちの卒業記念演奏会を成功させるために，心を一つに演技・歌唱練習に取り組む」ことで「共生的な態度」を養うことをめざした。

また，同小学校では，１年間の生活・総合学習のまとめと保護者・地域への発信の場として，年度の終わりに「お別れ発表会」を行っており，この行事も創作組曲同様に受け継がれてきている。一年間を振り返り，どの学年も生活・総合学習で学んだことを替え歌にしたり，歌を創作したりしながら，ステージ構成を工夫して発表し合うのである。そしてもちろん，こうした各学年末における発表体験の取り組みの積み重ねが，６年生の「創作組曲」の活動へと紡がれていくのである。

資料２．「創作組曲」３領域を横断する年間の活動の流れ（2007年度の実践から）

	生活・総合学習	ふれあい	教科音楽
４月 ↓ ３月	○活動のテーマ設定 「この社会で生きていくこと」 ○働く人へのインタビュー活動 ○きらきらワーク（職場体験学習） ○宿泊体験学習（職場体験・企業訪問） ●学びをもとにした組曲づくり 【創作組曲Ⅱ】 ・小中合同音楽祭での組曲発表 ・お別れ発表会での組曲発表	○「学びのノート」で自分見つめ ●学年テーマソングづくり 【創作組曲Ⅰ】 ○異年齢・同年齢集団によるさまざまな活動 ○宿泊体験学習 ●卒業プロジェクト活動 ・組曲プロジェクト他 ●卒業への思いをもとにした組曲づくり　【創作組曲Ⅲ】	○音楽大好き学年を目指して ・マーチングバンド練習 ・２部合唱，愛唱歌等での表現活動 ●主体的，創造的に取り組む音楽活動 ・組曲のメロディーづくり ・管楽器フェスティバルの練習 ・小中合同音楽祭の練習 ・移杖式の練習 ・お別れ発表会の練習 ・卒業式「創作組曲」の練習
	卒業記念発表会		

(1)　６学年「創作組曲Ⅰ　きらきら学年のテーマソングをつくろう」の実践から

同小学校の伝統である「創作組曲」への取り組みおいて，この年は１学期から創作活動を行い，見通しをもって組曲づくりに取り組むことを掲げた。そのため既に６月の時点で「学年テーマソング」に着手していた。この活動を通じて仲間意識の向上に生かし，きらきら学年への愛着を深めていきたいとした指導者の意図からである。そしてきらきら学年を表した文章のイメージに合うリズムや音，ＢＧＭなどを探す活動を通して，つくりたいテーマソングのイメージをもつことをねらいとした授業が展開された。

写真３．イメージマップ

きらきら学年のイメージについては，子どもたちから，言葉によるさまざまな表現を募った。その結果，「学年みんなのよさや，普段の姿が感じられる明るい紹介風の曲にしたい」という願いを掲げて，テーマソングづくりに取りかかった。活動を進めながら，「きらきら学年」から連想する言葉を集め，特に多かった「キラキラ」と「仲間」を『決め言葉』と定めた。次に，こうした決め言葉をベースとしながら，「きらきら学年」から始まり，決め言葉に結び付けるイメージマップづくりを行い，出てきた言葉をつないでひとつなぎの文章を作成する作業に挑んだ。（写真３．参照）

これらの活動を経て，子どもたちからは，次のような文章が提案された。「きらきら学年は，笑顔がいっぱい，楽しく過ごすおもしろい学年。ちょっと調子にのる人もいるけど，何かをやっているときは“キラキラ”光り輝いている」「きらきら学年は，笑顔と元気いっぱいの楽しい学年。いろんな活動で協力し合える“仲間”」

こうして生まれたさまざまな文章をもとに，さらにグループを単位としながら，みんなの思いをまとめていく活動に取り組んだ。具体的には，「キラキラ」と「仲間」の２種類の文章のうち，自分の思いやイメージがより表現されている方を選んで，一人一人が短冊に書いた。そして，それをそれぞれ黒板に貼り出し，思いが似ているものを集めてグループに分けていった。進行役の子，黒板で短冊を整理する子，全体を見ながら短冊の移動を指示する子などに役割が分かれ，スムーズに話し合いが進められていった。（写真４．参照）こうして分けられた４人程度のメンバーが集まり，

今度はさらに，言葉を１つにつなぎ合わせる作業を行った。次に示すのが，グループ単位でまとめられた文章の例である。

「大切な仲間とともに協力すれば，もっと友情が深まる。きらきらっ子は明るく元気なところがモットー。明るく元気なきらきらっ子は，今日も仲間とともに輝いている」（仲間：Ｂグループ）

「きらきら学年はみんなで協力し合い，いろんなことに挑戦だ。仲間を信じれば，きっと乗り越えられる。きっと何でもできる。キラキラ光る明るい学年」（キラキラ：Ｄグループ）

どの班も自分の学年に自信をもち，今ある姿を前向きにとらえて言葉や文章を一生懸命に考えている様子がうかがえた。

写真４．短冊を黒板に貼る

⑵　歌詞のイメージを生かした楽曲づくり

前時にできたグループに分かれ，そのグループでまとめた文章のイメージに合うリズムや音，BGMなどを探し出し，文章にこれらの音や音楽を重ねる活動を行った。使用する楽器は，さまざまな音色をもつ電子ピアノ（YAMAHA：SE7000）を中心に，鉄琴・木琴，打楽器，効果音CDなどを用意した。

キラキラＤグループは，自分たちが作った文章を読み，「明るくて楽しい」というイメージに絞って音探しを始めた。電子ピアノのリズム機能を使い，「マーチ6／8」を選んで文章に重ねることにした。４人で相談しながら，リズムやテンポを選び，「合うなぁ，合わないなぁ」と言いながら，自分たちのもつテーマソングのイメージに近づけていった。（写真５．参照）

写真５．イメージに合う音探し

仲間Ｄグループの文章には，「友情の結晶を輝かせる」という言葉が含まれていた。そこに着目し，「優しい光を放つようなイメージ」と決めて音探しを始めた。このプロセスにおいても，子どもたちは様々に言葉を交わし合いながら探究していた。

「“優しい”だから柔らかい感じだよね。」「あんまりテンポが速いとイメージが崩れちゃうもんね。」などと４人で相談し，真剣に音を探した後，次のステップとして，グループ毎の歌詞を学級全体に共通する大きなイメージに統合していった。

このプロセスにおいてお互いの発表を聞き合い，違いや良さを感じ合った子どもたちは，学年テーマソングづくりに向けて，「元気で明るいけど，静かなところもある曲がいい」という共通の思いをもつことができた。こうして完成させたテーマソングは，その願いの通り，「元気で明るい。楽しい感じ」「少し静かで輝く感じ」という印象が全面に打ち出された歌詞に仕上げられた。後日，１組が「仲間」をテーマに１番を，２組が「キラキラ」をテーマに２番の歌詞を担当し，学年テーマソングが完成した。さらに続く２学期には，インタビュー活動や職場体験学習，企業訪問などを通して，「働く」をテーマにこれまでの学びを詩や文に書き溜め，それらの文章を基にして「組曲Ⅱ」を創ることにも取り組んだ。

⑶　活動のポイントを総括する

本活動のポイントとして，授業者は次に掲げることがらを意識した。まず，全員が「創作組曲」にかかわるための工夫 を通じ，互いに高め合うことをめざす共生的な態度を重視することに努めた。テーマソングづくりにおいて，作曲という活動は個人の音楽経験の差が現れやすく，また，一人一人の思いを１つに集約することが難しいが，歌詞づくりならば，個人が考えた言葉を組み合わせたり，表現方法を相談したりして，みんなの思いを合わせていくことができる。こうした視座から，テーマソングの創作というという比較的取り組みやすい活動を設定したことにより，初めての組曲づくりに全員が意欲的に取り組むことができたものと振り返る。この活動を通じて，本稿資料１．「言葉の力」のモデルの「領域Ｂ　人間関係を豊かにする力」の要素とかかわる力を育むことができたものと捉えている。

また，「ふれあい・なかま」と教科としての音楽との関連では，創造的探求心に重きを置いた。そのための工夫として，単なる歌詞づくりをするのではなく，教科音楽との関連を図り，言葉と音のイメージを膨らませることで，自分たちがつくりたいテーマソングに迫っていけないかと考えた。この活動を通して，本稿資料１．の「領域Ｃ　イメージや感性を豊かに創造する力」に掲げられた力が培われたものと捉える。加えて，“創造的に音楽にかかわる”ために，言

葉と音でイメージを創る活動は，音楽科のねらいである「歌詞の内容を理解して，表現の仕方を工夫する」ことにもつながったものと受けとめている。

５．今後の課題と展望

本稿では，音楽学習における言語活動を取り入れた「活用型学習」を実践する際には，「かかわり合い」を生む手立ての工夫や「総合表現活動」によって，音楽学習にとって重要な非言語のコミュニケーションのみならず言語によるコミュニケーション力を高めることで「表現力」を育む「活用型学習」が展開できるのではないかという「仮説」のもとに国内外の実践事例を概観してきた。もとより学校現場における指導者は，「言語活動」を各教科の目標を達成するための手段として用いる，と解釈して実践に携わっているものと捉える。また，小学校指導要領解説 音楽編にも「感じ取ったことを言葉で表す等の活動を位置付け，楽曲の特徴や演奏の楽しさに気が付いたり，楽曲の特徴や演奏のよさに気が付いたり理解したりする能力が高まるよう改善を図った」と記述されていることから，「楽曲の楽しさ，よさを感じるために気付いたことを言語化する活動を重視する」というスタンスが，学校音楽に求められていることは明確である。

こうした視点から，本稿で取り上げた実践を考察してみると，言葉をもとにした表現の活動，コミュニケーションを通じて，思考・判断する様子がいずれの事例にも認められ，音楽的な表現に深まる様相が見られたのである。このことから，音楽科においても，言葉でのコミュニケーションにより，相手の考えのよい点を取り入れたり，互いのよい部分を認め合おうとしたりする動きが生まれていることが指摘される。このことは，相手の表現のよさや，自分の考えとの違いを認める態度や能力の育成につながるような学習展開を工夫することの重要性にもつながってくる。さらには，冒頭にも掲げた，「領域Ｂ　人間関係を豊かにする力」あるいは，「領域E　自分を励まし創る力」とも深くかかわってくる，言葉による活動と音楽学習とが，相互に深く関連することを物語るものであろう。

本稿第２項では，米国公立小学校の実践における週末の発表会の翌週に，母国語である英語の書き方の時間に作文を書くという学習に触れた。表現活動を自ら体験したり，目の当りに鑑賞したりした子どもたちが，仲間の演奏の良さを自らの言葉を手繰り寄せながら，思いを書くことで表現する活動をも大切にしていた。この米国の事例からは，表現の「鑑賞」に，さらに「書く」「話す」活動をつなげることによって，「実践的なコミュニケーションを育てることを目的とした活動」へと高めていくことが重要であるということが示唆される。

このように本稿で考察してきた国内外の実践事例を鑑みても，音楽的な活動において思考を働かせるには，言語を媒介とした活動が重要な役割を果たすことが見て取れた。音楽を通じてのコミュニケーションには，音・音楽によるコミュニケーションが最も大切であることはもちろんだが，言葉によるコミュニケーションも副次的に重要なのである。

また，「言葉の力」を育てることの背景には，どの子も言葉を用いてしっかりと自分の意見やアイディアを，基本形の活用によって個性豊かに表現する力を育てるという「活用学習」のあり方が問われている。それゆえ，指導者が授業マネジメントについて十分に検討し，音楽科における言語を媒介とした活動を活性化するための場の設定や手立ての工夫等に配慮することが極めて重要であるということを改めて強調するものである。そして，言語活動を取り入れた活用型の音楽学習が，今後も多彩に展開されていくことを期待したい。

引用・参考文献

時得紀子「総合的学習と表現教育」pp.131-148,　村川雅弘編著『総合的学習のすすめ』日本文教出版，1997

時得紀子「子どもを表現者にする総合的な学習」田中博之編著『総合表現型カリキュラムを創る』明治図書，pp.43-52，2001

村川雅弘・酒井達哉『感動を生み自信を育む子供と教師がともに成長する総合的な学習充実化戦略のすべて』日本文教出版，pp.8-9，2006

文部科学省『小学校学習指導要領解説　音楽編』　教育芸術社，2008

近有紀子「ふれあい「なかま」みんなで創ろう「創作組曲」～組曲づくりを通し，仲間のよさに気付き，認め合い高め合う子ども～」pp.39-42，時得紀子編著『総合表現活動の理論と実践』教育芸術社，2009

田中博之『言葉の力を育てる活用学習　－型を活用し個性的に表現する子どもたち－』ミネルヴァ書房，pp.1-11，2011

Tokie, N. “Integrating Music Activities With Other Subjects: A Way to Make Japanese School Music More Inclusive” ISME Asia-Pacific Regional Conference 2011: Taipei, Taiwan : Full Paper Proceedings of the 8th APSMER (Asia-Pacific Symposium on Music Education Research) Chapter 25, pp.1-10, 2011